

『死んでゆく気持ち』

## 単純でない』

もう一つ書きたいものに

心残して逝いた田山氏

島崎 藤村氏談

雨五六条春尚浅

鶯三四囀遠庭枝

点々隣家羨花早

雖有園梅我発遅

録

窓ぎわの壁にかかげたこの書を見つめながら島崎藤村氏は暗然としてもの静かに話をはじめた。

○  
八日頃から熱が急に上がったと聞いたので、わたくしは十一日に田山さんを見舞った。去年の暮から七度少しの熱がつづいていたらしい。わたくしの会ったその日は言葉は多少ききとれないようなところもあったが、見る力も聴く力もまだはつきりしていました。そのとき田山さんはわたくしの顔をじつと見ながら『もう自分も死を覚悟せねばならぬとおもう。いまはただ時の問題だ……』と静かにいった。『この世を辞してゆくのはどんな気持ちですか』と露骨に聞いたわたくしの言葉に対して田山さんは『だれも知らない暗いところへひとり

ゆくのだから、死に面した気持は単純なものじゃない……』と答えた

○  
でもなかなかいろいろなことに気をくばっていたらしく、わたくしが改造社の円本花袋集についているリーフレットに書いた花袋氏の感想のことを『あれは読んでうれしかった』と礼をいつてくれた。三十七、八年このかたの長い交友です。万感胸に迫ったのでしよう、田山さんは目にいっぱい涙をためていた。丁度医者 came たのでわたくしは病室を退いて奥さんとお話をしたがその時の話では、田山さんは『自分ももうひとつ書いておきたいものがあるのだが、筆をとれないのが残念だ』と奥さんにいわれたそうだ。

○  
『もういちど顔を見せてくれ』とのことで医者の帰った後でわたくしは再び病室へ入った。すると田山さんは『注射をしたから自分はこれからねむくなる。だから別れをつげよう……』そういつてからなおしばらく話をつづけて、枕もとの紫陽花は柳田国男氏がくれたものとか、床の顔真卿の石刷りの書はどうして手に入れたかなどと話していたがわたくしにはよく聞きとれなかった。

○  
田山さんはすでにながいが眠りを覚悟したのだ——とわたくしは帰り途でひとり思った。この壁の書は田山さんが最近書いた七言

絶句ぜっくの一首しゅです。だが録彌ろくやの花袋氏かたいしはすでに逝せってしまった。

※本文の表記は、できるかぎり常用漢字・新かな遣いに改めた。

※出典 当館所蔵 田山家資料新聞切抜帳より